

戦後80年 いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過しました。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第18回 焼け野原の後を生きて

田村 鈴子さん 昭和7年生まれ

昭和16年、私は国民学校に通い、両親と兄、弟、妹とともに兵庫県で暮らしていました。その年の12月8日、太平洋戦争が開戦。ラジオからは「日本は神の国だから負けることはない。神風が吹く」と繰り返し伝えられていました。

戦火とともに壊れていった私の日常

昭和20年には戦況が一変し、日本本土がたびたび空襲を受けるようになりました。学徒動員で学校へ行つても勉強どころではなく、グループごとにその日の作業が指示されました。私たちは阪神間(大阪と神戸の間の地域)にある酒造会社の焼け跡でくぎ拾いなどをさせられました。先生から「拾ったくぎは鉄砲になる」と言われていましたが、ある日、「もうくぎ拾いはやめて、焼け跡に残った米を拾いなさい」と言われました。焼け焦げた、玄米茶に入っているような小さな米を集めて、ハンカチに包んで持ち帰りました。学校に戻る途中、海辺へ寄り水筒に海水をくむこともありましたが、空襲警報が鳴ると急いで林へ逃げ込んでいました。

友人の一人が「履物を忘れた」と浜辺に戻った際、低空飛行していた戦闘機に撃たれて命を落としました。まだ子どもだった私でさえも、それがとても残酷で許せない行為に思えました。

学校では、先生から「○○さん、○○さんが昨日の空襲で亡くなりました」と知らされるばかりでした。そして8



親しかった兄と写る田村さん(右・昭和10年頃)

月6日には、阪神間でも空襲があり、私の家にも小型爆弾が2発落ちました。家族6人の命が奪われましたが、奇跡的に私は生き残りました。体は傷だらけでしたが、不思議と痛みは感じず、涙も出ませんでした。一番つらかったのは、食べ物が全くなかったことです。

その後、8月15日に終戦を迎えました。喜ぶ人、悲しむ人、さまざまでしたが、私には何が起きているのか分かりませんでした。

ある日、友人の親戚が米を作っていると聞き、分けてもらいに行きました。物々交換が当たり前だった当時、田舎のおばさんに「そのセーターと交換してあげる」と言われ、交換してもらいました。しかし、国が物資を厳しく管理していたこともあり、淡路島から明石へ渡る船を降りたところで警察に捕らわれ、米は没収されました。服を差し出して手に入れた米が取り上げられた悔しさに、私は涙を流しました。

また、私たちには別の心配がありました。「米軍が神戸に上陸したら男性は殺され、女性は連れ去られる」とうわさが広がり、毎日おびえて暮らしていたのです。しかし、実際にはそのようなことはなく、米兵からチョコレートやチューリンガムをもらい、喜んでいたことを覚えています。

戦争を二度と繰り返してはいけません。世界中の人々が仲良く、幸せに暮らせるよう、心から平和を祈ります。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎ 20-1534)へ。



令和8年1月15日号 No.1547



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です

*本紙は1月5日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

皆さんはお正月をどのように過ごしましたか。私は運気上昇を願って元旦にうな重を食べるのを恒例にしていて、今年も家族でおいしくいただきました。参詣客で最もにぎわう時期とあり、表参道周辺まで行ったものの初詣は断念。一般的には三が日や松の内までとされていますが、成田山では一年で最初のお不動様の縁日である1月28日が節目とされています。混雑が落ち着いてきたこの頃、まだお参りが済んでいないという人は出かけてみてはいかがですか。

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。